

全ての女性がいつまでも若々しく、活き活きと
過ごして頂けるサポートが当クリニックの役割です

医療法人社団都筑会

つづきレディスクリニック

理事長・院長 吉岡 範人



あらゆる女性の悩みに対応する 横浜市の産婦人科クリニック

産婦人科×〇〇で女性が喜ぶ様々な医療サービスを提供

明日の医療を支える信頼のドクター

産科医療に従事していた両親の影響で産婦人科医を志す

子どもの頃に鍛えられた心配り・心配りの精神

神奈川県横浜市、横浜市営地下鉄センター北駅から徒歩すぐのところにある医療法人社団都筑会つづきレディスクリニック。女性特有の様々な悩みや疾患に幅広く対応する同クリニックには、口コミや紹介で評判が広がるなどして、現在多くの患者が足を運ぶ。「家事や育児、仕事、学校など、様々なステージで活躍する全ての女性が、いつまでも若々しく、活き活きと過ごして頂けるようなサポートを行うことが当クリニックの役割です。最終的なお悩みの解決はもちろん、通院・治療期間にもできる限りの安心・快適を提供できるよう、情報発信や院内環境づくりといった部分にも色んなアイデアを取り入れています」

こう力を込めて話すのは、理事長・院長の吉岡範人医師。2019年に院長就任以来、オンライン診療や訪問診療、医療脱毛といった産婦人科領域では前代未聞といえるような斬新な取り組みを次々導入し、わずかな期間で人気のクリニックへと成長させた人物だ。そんな吉岡理事長に、自身のこれまでの歩みや現在の取り組み、今後のビジョンなど多忙な合間を縫って様々なお話を伺った。

1978年生まれ。現在44歳の吉岡理事長がそもそも医師を志したきっかけは、「生まれた環境や育った環境が大きかった」という。「私は父が産婦人科医で母が助産師、実家が産婦人科病院という家庭で育ち、分娩が始まれば食事が出てこなかったり、旅行が中止になったりと、小さい頃からお産に左右された生活が普通でした。こうした環境でしたので、気づけば自然と産婦人



全ての女性がいつまでも若々しく、生き活きと過ごせるようサポート

科医を目指していました」

また当時は、非常勤の産婦人科医たちとの交流も多くあったという。そしてその交流が、「今の私の医師としてのベースになっている」と吉岡理事長は話す。

「実家の病院に応援に駆けつけてくれる非常勤の先生方の休憩・待機場所が、私が普段過ごすリビングでした。私からしたら急に知らない偉い人が来る中で、何かをしてあげないといけない。頭をフル回転させながら色んな話をしたり、お茶や食事を出したり、いわゆる接待ですね。この時に人への気遣いや人のニーズを捉える感覚が磨かれたと思っています。今私が提供する医療スタイルに大いに活かされています」

こうして医師を目指した吉岡理事長は、中学校を経て聖マリアンナ医科大学へ。大学では、医学の勉強に励むとともに、スポーツと音楽に

大きなエネルギーを注いだ。

「大学でも中高から続けていた水泳とドラムに打ち込みました。またスキューバダイビングのインストラクターの資格を取得し、大学で部活を立ち上げ、企業とも協力し、ダイビングインストラクター業も行っていました」

医学分野だけではなく、他分野の活動にも情熱を注ぐなど、充実した大学生活を送った吉岡理事長は卒業後、同大学の初期臨床研修センターへ。産婦人科をはじめ、救命救急、内科、外科、小児科（新生児）を研修し、医師として幅広くスキルを磨いた。

大学病院勤務や海外留学で医師として経験を積み上げる

2019年につづきレディースクリニックの院長に就任

研修で幅広い分野の経験を積み上げた後、吉岡理事長は聖マリアンナ医科大学病院産婦人科に入局。ここで16年間という長きに渡って臨床と研究に従事した。「周産期、更年期、不妊など、色んな経験をさせて頂きましたが、中でも私が専門としていたテーマは婦人科腫瘍でした。特に若い世代のがん患者さんを多く診させて頂き、若い方がんと闘いながら将来の妊娠のことなどを考えられるようなサポートを行っていました」

こうした大学病院での活動の一方、2013年からの2年間はカナダ・ブリティッシュ大学への留学も経験する。

「英語力の取得やがんの研究など、大きな収穫もありましたし、カナダの方々皆優しくとても素敵な時間を過ごすことができました」

大学病院での活動や海外留学など、順調な医師キャリアを歩んでいた吉岡理事長が、開業医への転身を考え始めたのが2017年。

「元々つづきレディースクリニックの院長だった佐藤先生に、承継のお声がけを頂いたことがきっかけです。急なことでしたが、私自身医師としてもっと成長できるのではと、お受けさせて頂き



ました」

こうして2019年に、前任の佐藤理事長から引き継ぎ吉岡理事長となった新生・つづきレディースクリニックが誕生した。「引き継いだ最初の1年は、とにかく既存患者さんたちをしつかり診ることに必死でした」

吉岡理事長の診察はすぐに地域の患者に受け入れられた。また2年目以降取り入れた新たな取り組みも功を奏するなどして、クリニックは成長軌道に乗り、今や地域に不可欠な存在となっている。

女性の抱えるありとあらゆる悩みやニーズに応える豊富な診療メニュー

月経困難症の治療を通して女性の受験やスポーツ、ビジネスをサポート

吉岡理事長が引き継いで4年目を迎えているつづきレディースクリニック。人工妊娠中絶やピル、アフターピルの処方、各種ワクチン接種（子宮頸がん・風疹）、妊婦健診、更年期障害、訪問診療などから、医療脱毛や各種点滴、プラセンタといった美容医療も提供し、女性の抱えるありとあらゆる悩みやニーズに応える診療メニューを揃えている。

クリニックを訪れる患者は、10代、20代、30代と比較的若い世代の女性患者が多いという。

「皆さん色んな悩みを抱えて当院に来られますが、最近多いのは月経困難症、いわゆる生理に関するご相談です」と吉岡理事長。

「生理に伴う痛みは低用量ピルを上手く使うことで軽減できるなど、コントロールすることが可能です。例えば学生の方であれば、大事な受験やスポーツのパフォーマンス向上のため

に当院に相談・治療に来て頂くケースが多くあります」

「また今は仕事をバリバリとこなすビジネスウーマンのご相談も増えていきます。女性の社会進出が当たり前となった今、生理痛による経済損失は5000億円とも言われるなど社会的課題となっていて、働く女性のサポートも今後当院が積極的に担っていければと考えています」

さらにこの点に関して吉岡理事長は、「情報発信も重要」だとも。

「生理痛の辛さや、その辛さを薬でコントロールできるということをもっと世の男性に理解して頂きたい。特に男性経営者の理解があれば、経済の活性化に繋がることは間違いないと私は思います」

生理痛は痛みがある一方、検査で引つかかるようなものではないことから、痛みを我慢して生活を送る女性も多い。

「切実に悩まれている方もまだまだ多くいらっしゃると思いますが、1人でも多くの助けになっていきたい」と吉岡理事長。



月経困難症を改善し、部活女子の活躍をサポートする学校講演会。
オリンピック選手の萩原智子氏も共演



産婦人科では珍しい訪問診療の取り組み

40〜50代の終末期の患者とその家族を親身にサポート

つづきレディスクリニックで提供する医療の1つである訪問診療。産婦人科の医療機関では全国的にもほとんど例のない珍しい取り組みだ。「導入のきっかけは大病院時代に診ていた終末期の患者さんの一言でした。『私が亡くなるその時まで先生に診てもらいたい』と」

導入以降、前述の患者を含め、幾人かの患者の訪問診療を行ってきた。「私が訪問で診る患者さんは末期がんの方がほとんどですが、皆40〜50代と年齢が非常に若い。これは婦人科系のがんだからともいえるでしょう」

患者本人への医療的なサポートはもちろん、患者とその家族の心の支えとなる親身なサポートも行い、時には患者と本家の家族のような付き合いになることもあった。「年齢が若いことからお母様が看取るケースもあります。最後にやりたいこともお年寄りの方とはまた違う。大変な仕事ではありますが、患者さん本人やご家族の方に喜んで頂けるので、やって良かったと思います」

もう1つ、新たに導入した産婦人科では珍しい医療脱毛の提供も近年問い合わせや希望者が増えているという。「VIO脱毛を主に行っています。受けて頂いた患者さんから『痛みも少なく、施術時間も短かった』と満足のお声を頂いています」

訪問診療や医療脱毛など、既存の産婦人科医療の枠に捉われない独創的な医療サービスを提供する吉岡理事長。「患者さんにより良い医療を提供するにはどうすればいいか。ここを考えたときに私ができることは、既存の産婦人科医療とプラスαの何かをかけあわせて新たな価値、新たな医療サービスを生み出すという取り組みでした」

現在は、フェムテック（女性の健康課題をテクノロジーで解決する製品やサービス）とのかけあわせで新たな価値創出を模索している。

フェムテックをキーに女性の健康支援に繋がる新たな価値を創出

「今後、色んな業種・業界の方々とコラボをさせて頂きたい」

「フェムテックの一環として現在月経周期管理アプリや月経カップ、生理ショーツなどがありますが、世の女性の認知や理解がまだまだ不足しています。これらの製品、サービスの活用法やメリット・デメリットといったものを当クリニックからどんどん発信、提案できればと考えています」

さらにフェムテックに関して吉岡理事長は、「医療脱毛など、ある意味当クリニックで提供する医療や取り組みは全てフェムテックになります。オンライン診療やフェイスブック、インスタグラム、HPなど各種SNSからの発信、そしてセミナー活動もフェムテックです」とも。

フェムテックをキーとして、女性の健康支援に繋がる新たな価値を生み出す吉岡理事長。2023年3月には、『フェムテック 女性の健康課題を解決するテクノロジー』（幻冬舎）という書籍の出版も果たした。「今後も世の女性に喜んで頂けるような、色んな医療サービスを生み出していきたい。今考えているのは1つのビルの中で、産婦人科、女性専門の内科、皮膚科の医療機関を作るとともに、美容院やカフェ、占い、コインランドリーなども併設し、女性が喜ぶサービスを集合させた複合施設です」



「産婦人科×○○のようなコラボを色々な業種・業界の方々と行っていきたい」と話す吉岡理事長

常に情報に対してアンテナをはり、多くの方々には「産婦人科×○○のようなコラボを色々な業種・業界の方々と行っていきたい」と話す吉岡理事長

常に新時代の産婦人科医療の形を模索。女性のニーズを捉えたこれまでにない新たな価値をどんどん生み出すべく、今後も産婦人科医療業界に革命を起こしていく。

吉岡 範人 (よしおか・のりひと)

昭和 53 年生まれ。千葉県出身。
平成 15 年、聖マリアンナ医科大学を卒業。その後同大学の初期臨床研修センターに配属。
平成 17 年、聖マリアンナ医科大学産婦人科学教室に入局。大学院生として臨床と研究に従事し、『卵巣明細胞腺癌における POU6F1 の役割の解明』をテーマに医学博士号を取得。
平成 25 年、カナダ・ブリティッシュコロンビア大学に留学。
平成 31 年、医療法人社団都筑会つづきレディースクリニック理事長・院長就任。
令和 3 年、東京オリンピック水泳競技の救護ドクター、東京パラリンピック水泳競技のドクターボランティアとして参加。
著書に『フェムテック 女性の健康課題を解決するテクノロジー』（幻冬舎）がある。

所属・活動

日本産科婦人科学会専門医。日本産科婦人科学会指導医。日本体育協会認定スポーツドクター。母体保護法指定医。婦人科腫瘍専門医。日本母体救命システム普及協議会 JCMELS インストラクター。スキューバダイビング PADI イントストラクター。日本産科婦人科学会会員。日本婦人科腫瘍学会会員。日本超音波医学会会員。日本産婦人科新生児血液学会評議員。日本女性医学会会員。日本産科婦人科内視鏡学会会員。

所在地 〒 224-0003
横浜市都筑区中川中央 1-2-1
ヴァンクールセンター北 4F
TEL 045-910-0234
FAX 045-913-0007



アクセス 横浜市営地下鉄「センター北」駅より徒歩 1 分

設立 平成 19 年

診療科目 婦人科、産科、産婦人科

診療時間 <月～金> 9:30～12:30、15:00～19:00
<土・日> 9:30～12:00
<休診日> 祝

院長からのメッセージ 当院の院長の吉岡です。医療は患者さんのためにあるものですので、その方にあったオーダーメイドな治療を心がけていきたいと思っております。最終的には患者さんの希望に沿った医療と一緒に選択していきましょう。よろしくお願いたします。

<https://www.tsuzuki-ladys.com/>